

スポーツ離れを解消する新システムの提案

—大学生の目線から—

東海大学 萩ゼミ

○立谷 勇樹 後藤 美夏 譚 文彬
坪井 華 中本 みな美 渡邊 智香

1. 目的

日本のスポーツ振興について学ぶ中で、子どもたちの体力及び運動・スポーツへの興味関心の低下という事実と直面し、現代の「スポーツ離れ」という問題に強い関心を抱いた。私たち大学生の目線から、この状況を緩和する新システムを提案したい。

2. スポーツ離れの定義

『現代社会の変化によって、「する・見る・支える」の3つの側面において人々のスポーツへの興味関心が著しく低下している状況』

以上をスポーツ離れの定義とし、ヒューマン、ファシリティ、メディアの3つの観点から考える。

3. 現状と問題点

- ① ヒューマン：娯楽の多様化と内遊び文化の拡大によるスポーツへの興味関心の低下及び、コミュニティの減少。（日本の社会問題の原点ともいえる状況）
- ② ファシリティ：過剰な安全面の配慮による施設利用における制限によって、子どもたちの遊び場が奪われて、運動・スポーツの機会が減っている。
- ③ メディア：視聴率重視の番組が増え、子どものニーズに対応していない番組編成の増加及び、メディアによる過剰演出。（アイドルの抜擢、スポーツ報道のドラマ化など）

4. スポーツ大国アメリカの事例

アメリカを視察して

- ① ヒューマン：NCAAアメリカンフットボールイリノイ大学ホームゲーム
イリノイ大学のホームゲームを大学と周辺地域が一丸となって作り上げている。
すべての世代が試合に関わり、様々な角度から一生スポーツに親しむことができる環境がある。
- ② ファシリティ：ARC (Activity Recreation Center)

イリノイ大学には、学生、教職員、地域住民、老若男女問わず誰もが自由に利用できる大型スポーツ施設がある。

- ③ メディア：24時間幅広い種目・年代のスポーツを扱っているスポーツチャンネル（ESPN）があり、スポーツの魅力を最大限に引き出している。

※プレゼンでは、現地の写真を交え紹介

5. 結論と提案

『大学側から、全ての世代がスポーツに親しめる環境および人の成長過程において一生スポーツと関われる環境作りへのアプローチをする』

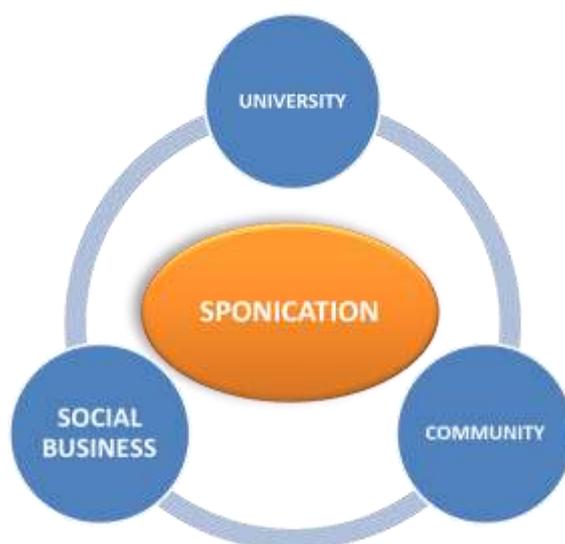


図 1) スポーツ離れを解消する新システムサイクル
3つのキーワードから新たなスポーツライフを構築する

6. 今後の課題

- ・大学と社会事業者と地域住民の連携
- ・大学の資源を有効活用にする組織の必要性

7. 参考文献

笹川スポーツ財団 スポーツ白書 2011

統計省 平成 18 年社会生活基本調査

イリノイ大学 HP <http://www.uillinois.edu/>

島崎仁 『スポーツに遊ぶ社会にむけて』 不昧堂出版 1998. 7